



森の諏訪神社の泉和

水を指すらしい)で流失、後に再建されたと、来由を書いた明治二十九年八月の碑が、森の入口左側にみえている。氾濫原の中央に位置しては、そのような災害はまぬがれ得なかったろうとも思われる。直盛は芦名七代で幕の内の小館に移り、後に小田山に築城し、明徳元年には山城国で戦死した勇将であったから、諏訪神社の勧請も充分考えられるが、最初からこの地に遷座されたものでないことは、来由の記録でもわかる。

寺院が二カ寺になっているのも、清水を根じろにして何カ所にも村造りしたことよると思われるが、知徳寺は永正年中(一五〇四〜一五二〇)雲龍という僧が住んだとある。本尊は延命地藏尊で、御丈四七センチ、牛沢組の大徳寺の末寺になっている。地藏尊は側にもう一体並んでいて、御丈もやや大で五五センチある。当寺開山は締巖善察大和尚と伝えるが、詳細は不明である。

台泉寺はやはり泉に関係あるが、本尊は阿弥陀如来、御丈五一センチ、どうして磐城専称寺の末寺になったかの来由はよくわからない。

付 寛文五年書上げ

和泉村

一、若松の西北十里に有、東西一町五間、南北四十八間、里民相伝往昔此処に清水湧出る、其味他の水に異なり、故清酒を作る、因之に泉村と名く、家居乱にして図何れとも難記、村建始の年歴不詳。